



繪本拾遺信長記

五

19  
3564  
18





門 13  
號 3564  
卷 18



繪本拾遺信長記後篇卷之八

目錄

秀吉ひでよしと重幸しげゆき戰小清水こしみず水軍みづぐん

根素ねす乃小密茶屋こみつぢや戰いくさ二重にじゅう

羽柴はしばし珍本ちんぽん小清水こしみず又對戰またたいせん

重幸しげゆき布八陣ふはつじん戰秀吉しげゆき幸ゆき

諸しよ又兵またへい羽柴はしばしが陣がじん後ご以も

秀吉しげゆき豫敵よてき方かたの疾討しやくたうを察さつ以も

繪本拾遺信長記後篇卷之八

早稲田大學圖書館  
34.6.3  
藏書



秀吉重幸同書

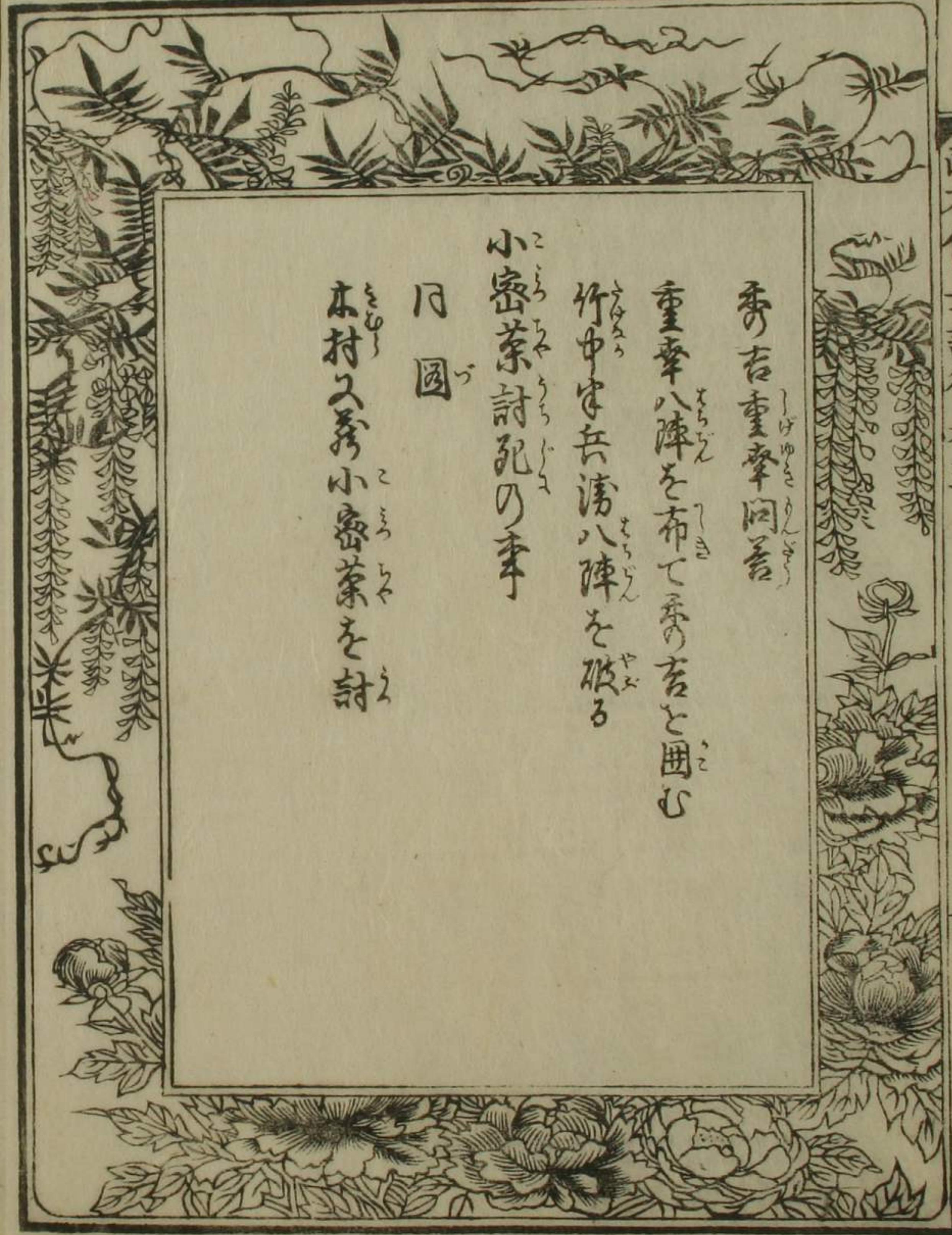
重幸八陣を布て秀吉と圍む

竹中半兵衛八陣を破る

小密茶討死の事

日圖

本村久秀小密茶を討



繪本拾遺信長記後篇卷之八

秀吉と重幸戰小清水事

天正六年二月廿八日石山乃軍師鈴木源左衛門尉重幸八傳又  
一万余騎の兵と小清水の陣を立秀吉が菟川の陣不承書と送  
る秀吉先を刃くるとやくも重幸が戦死と人き心を推し  
返書と送て其後川と流り重幸が陣と其間十余町と隔  
陣と立け時三伝中傳信忠卿石山乃遠まきして押しけれ  
秀吉重幸討死のよし一書一石も明智日向身惟信又即左衛門  
尉半兵衛引合し其勢一万三千人秀吉が陣せし菟川より出張  
軍威と輝して戦いを後け終ふとやくも小秀吉重幸の両方  
互に陣と押し出し矢以進くやう頼又先鋒波と波し双方一傳の





根来の  
小島葉  
血角





鉄砲を打出し 砲烟の下より突出の小鎗槍やよりたんとやわらむ  
 何いてぞ戦ひたるが重幸が先ねい石山嶽中よりて勇名の中へ入る  
 根来の悪俗小密茶三百余騎とけりし先よ馬とわづせ例  
 の八角掛成りしとけりし羽柴が先陣中村孫平治堀尾常  
 刀が七百餘騎の其中へ羣詰天のてく叫てうけ入る人馬  
 のきしひるくむらりくとあやむ小武の隊を腹内へ折こむれ然の  
 中天より叩きよる勇とるふと悪戦は進の進う是又款と入き  
 中村堀尾が陣勢は五と三丁并のうれ引よ引りたる是と見て  
 中軍より扱へる鈴本を率凡百餘人と共丸又体人小密茶が  
 戦いと老よりと秀吉乃本陣へ一文字に突りし羽柴が勇は  
 朝神孫平勝源賀小六も多宿平等一万余人左右より助け合

せ重幸と中よ是ころ火をらしし戦ふより重幸元来一万余  
 人の勇あり強のより三丁并より乃鎗槍編妻のてくらめ  
 けし又百餘人の後幸とも突りてく進退し其さまのくげしき  
 り恰も天神のてく羽柴が勢恐怖して進も得ん勝源賀も  
 多のあねむ勢とわぬし百挺斗の鉄砲とを率に勢の中へ一日  
 ころと扱へるしとてとむる本が透るりる鎗と入突崩  
 んと揺るりたる鈴本を率先ととく大さ小怒り鎗をい海門て  
 ころく款又鎗のく突ましく戦へる再び羽柴方つらめたる  
 是も日づく三丁并引りたるけの戦ひにじまると吾や後陣よ  
 けし鈴本孫市志摩よに即右も入まりて秀吉が旗本一切  
 う秀吉が旗本の勇士加反虎之次福海市松斤相助他等





其二



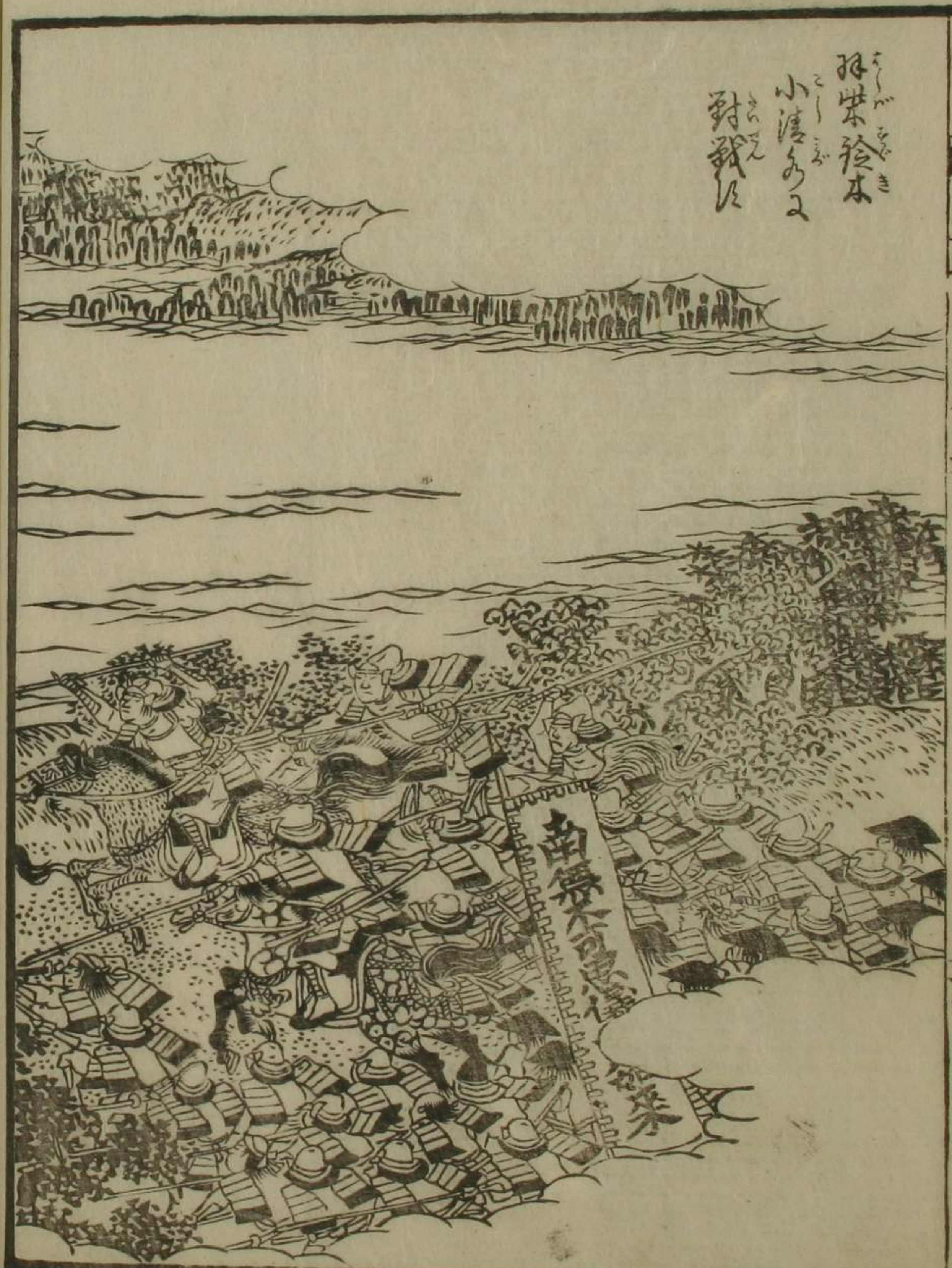
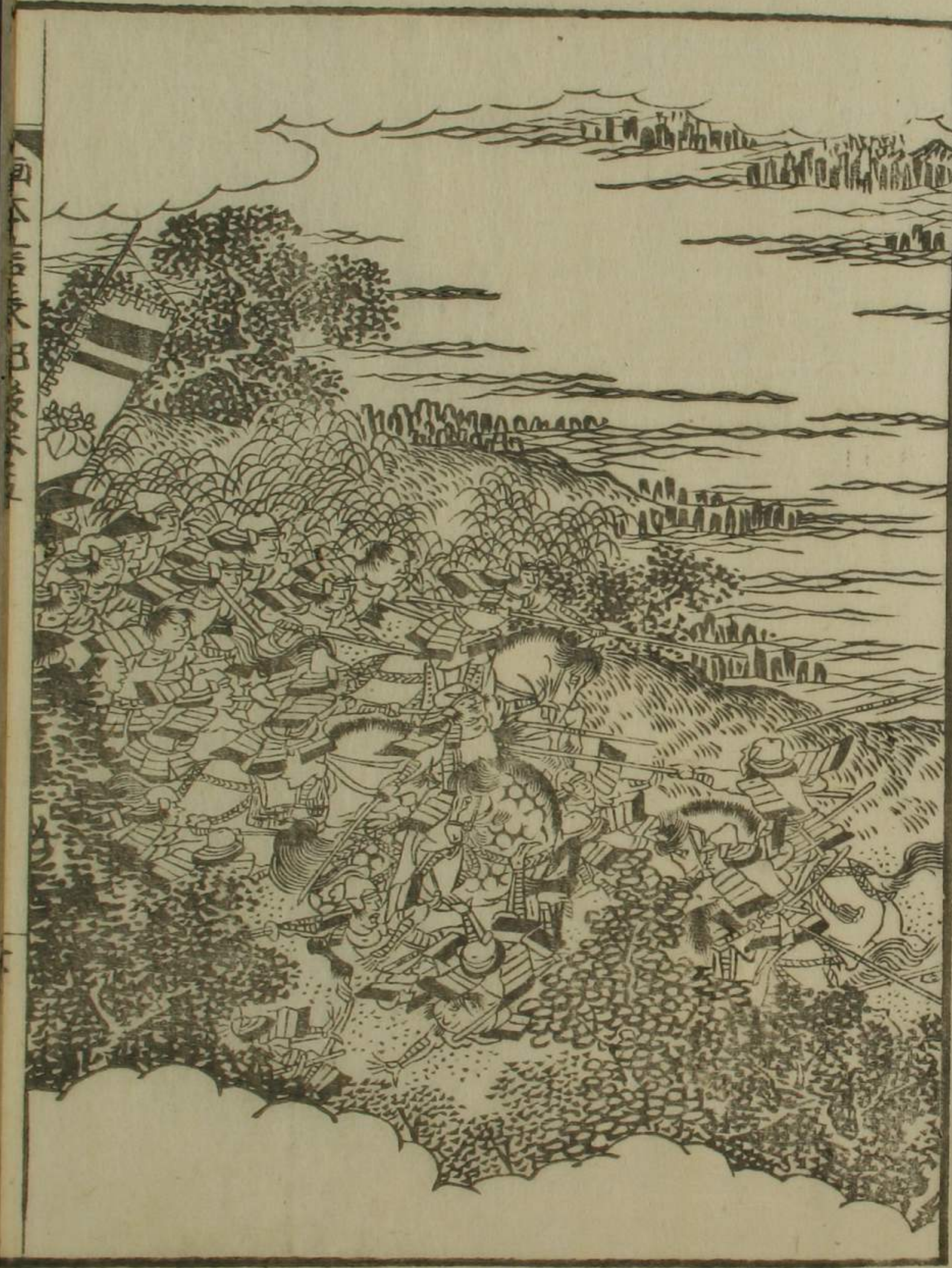
國本信長言後卷五



惣持平秋坂新内が軍槍をあげていふ人我ひ互方必驚の勇士の  
 りしが陰陽用困虚く空く退けまら川つ原越すり申のく息  
 をもつがに我ひしに烈しうろろ合戦ありけ耐飛柴が先陣中村  
 源尾死力を盡し血我をれと小密柴が勇壯にうろろく侍へと三  
 方級既えりうろろ川の小岸は三佐中ぬ信忠郷にじり  
 すり同じ放さばけ合戦と河邊じろろがといや秀吉が陣脚乱し  
 うろろ川と後して敵へやとり知し後人の明智先秀惟後長秀  
 六十余人の勢と率し既え川岸に集りうろろ耐石山すりも援兵  
 とり久く其勢ん又又計南に阿弥陀佛の旗三十余流川風  
 と吹ちびうせ急いしく夢をて押来る小ぞりいや只今え合戦あり

ぬらんを勝れしうろろ若はしけ耐を率いふとひく急引貝  
 と吹ち清とるりし軍兵をまどり急いしくと小清水のを陣へ引  
 るろろ小秀吉も又敵て我ひとあさば日く勢を引入地陣と固  
 め寂持としく侍うろろ流え双方希代の名おろりうろろ  
 法より引し則あり軍率と進退とるりし恰も風り本意と吹  
 すりも耐煙しけ耐信忠郷の河勢に合戦の敵じうろろ川と  
 川と流えに再び本陣へ引入るるが猪子兵をみて秀吉が陣  
 又進りこれ同せ侍りの鈴木を率勝り系をり國成を侍り  
 軍をまどりしといろろあさ秀吉言て先ぬ信忠郷の河勢  
 川と流えに侍りあさまをて侍りか耐後と包し進はじとの計  
 ひうそりべし猪子又曰く石山城より後治の勢又へるを率





孫策 珍本  
小治 あり  
對 戦 以

孫策 珍本

六



我ひを助んん中ねの河勢川と後とくも何の思とく  
 ろんきやあろ若あふく傍と勢りくろ本松瓜指に「毛見は人  
 け森又軍兵瓜原一屋が三百人の埋伏とに」我珍本が軍法  
 と達したるを知しるは又森又原へ兵引よるを率伏兵の  
 んのと思とく勝策とせりあはれんうり我却てけ森二人も伏兵とあ  
 けを率よりけ瓜原の敵うんうは伏勢とあてお破る也」これ敵  
 の甲乙よんく敵の計も又計あり猪又又曰く重率か別走附退  
 討に討に勝利みん小足下毛をなまらるいいう小秀若書て其討はけり  
 中ねの河勢岸は勝も既も川と後とんん其重率と退るが勢ひと  
 を河勢しんくを折後て某が我ひを助け大ねの河津を勢りて」重率  
 小軍法と達」兵を用ゆるんが若津のりて」石山の後兵をんて率よけ方

けり川を後」信忠御の本陣と討んう後うけてみるがに」自他大  
 ねの河津よりやまらあはき率どれ若若百人討に」く何のあふ  
 むんき此をんて某軍とあきら河勢の川と後と瓜止めうり猪又兵が軍  
 議と定て感懐と流」宅も功若の軍法を承り我軍の後学育に  
 てあつは」きりうてんけ中ねの河津と達」るん感懐少  
 くるまど」くはて河本陣へゆりたる

重率布八陣我若の若率

其夜我若陣外に出くたるう小重率が陣と條も見んはた  
 ろびき後ろ霞の向より兵糧炊くけりゆりゆりくとま  
 のがまろり若若見く叔の重率我陣へ夜討とらるに」さて  
 いそぎ陣をにゆり朝建坂尾勝領が中村が守とふに」





猪子兵助  
孫紫  
陣一  
段に





て豫合戦乃用志とほし近習の士斤切助作と呼て中後し  
多の汝馬とて川と後し信忠郷乃本陣と集りやるるに  
鈴本重幸今宵亦あが陣と後討仗べき活構能は足履  
いせしと合戦にじまりいともかまへず所勢と分ら道御助勢  
及び中はじくいな亦若不肯より人とも鈴本どれた若の  
よりろき後軍の仗るはじきよは且ハ沖本陣不勢よいてい  
るら凶みり出素せんもとろりつらふ其上は遠の百姓た  
一向宗門乃若多くもむへ密に右と計略と志し合せ  
奇兵とぬく龍多の素らんも計るるら何と沖ゆざん  
く密固と陣不攻を固めらよはなだれ高大おへ重と中せ  
よとく助作と港し重今心は折るる露斗りはし今よい

重幸と討んす豊の内よありと心給ひ討刺の移るをお  
待たり鈴本源丸傍門耐重幸の通て討死と覚悟成さしめ  
これに激しゆるんき心とらなかり信忠亦あ若と討て美泉の  
若繩とぬらん若志うらひの亦若よ一言の我志と告んり  
少しく計策と構へ鈴本源市志摩と甲郎と大おし其勢  
三百余人鉄炮火箭投ねるを多くおせ後乃子魁むり  
川を渡し信忠郷の陣と後討せしむ其乃ハ又百余人と先  
進と根素乃小密系日又百余人後陣と隊石とより素りし  
軍勢の陣不たれらり奇兵をるにじり同時と亦若を陣不へ  
照へる門めてをりせり羽柴が陣不は勢とてころめり  
きんぐよ用志たりともいざれは國の憂をよるといしく重幸馬と





秀吉  
あつじめ  
歌方り  
夜討と  
あふん





おもくせし陣中へ突のこるに難しし物の空しく本の技よく  
 其附敵一人もあらずれば南無三空秀なる計略に端りたる  
 ぞや急よ引んとせば却て味方敵軍なるぞけりて身を  
 立敵のち御見物せよと小密茶が勢と一もにあり急隊  
 を八門よまきつり入りて扱しに燃え希代の名おる  
 と世人こそ門く英傑とせり抑八門の陣とらふ若時英  
 帝の后風后氏天地風雲龍虎鳥蛇の八つの物をわけて  
 陣門よ配し雲をと逐麻のせよ滅せり三國の術よわめて諸  
 葛武侯は陣法と考て奥後浦永安宮の南灘の沙のうへ  
 石とせり八陣と布人あはけし八陣とせば八陣とせり八  
 六十日の門とあり敵て破て出るを得ん若し風雲雲後重て

非の儀とる若のどし重幸は八陣よ配し年代にして天覆  
 地載風揚雲空龍飛虎翼鳥翔蛇蟠の軍隊とつり孫自中軍  
 馬を立敵の配るに付に方八面悉く羽柴が伏兵周と他  
 老より朝中孫平次右より勝須賀小六左より富  
 平後より源尾花助右より羽柴龍守守龍守の軍兵を引  
 けし敵よの炬火一日は照りくやき風よより後蓋の火と敵ら  
 ぐる小元来暗黄燭硝とそき入るれば八方よわくじり重幸  
 が陣よ火勢おひくまじも奇なるる八陣の火のふれに  
 りるく楠の下の槍とそび息とほめて扱しに付重幸陣  
 ちの馬と馳出り羽柴龍守守のつぐまありや鈴本源九郎門  
 耐見事いへんとも夢よ吹りれば秀吉も日く陣改よ馬と乗





西ノ門ノ外ノ陣



秀吉  
重幸  
同若

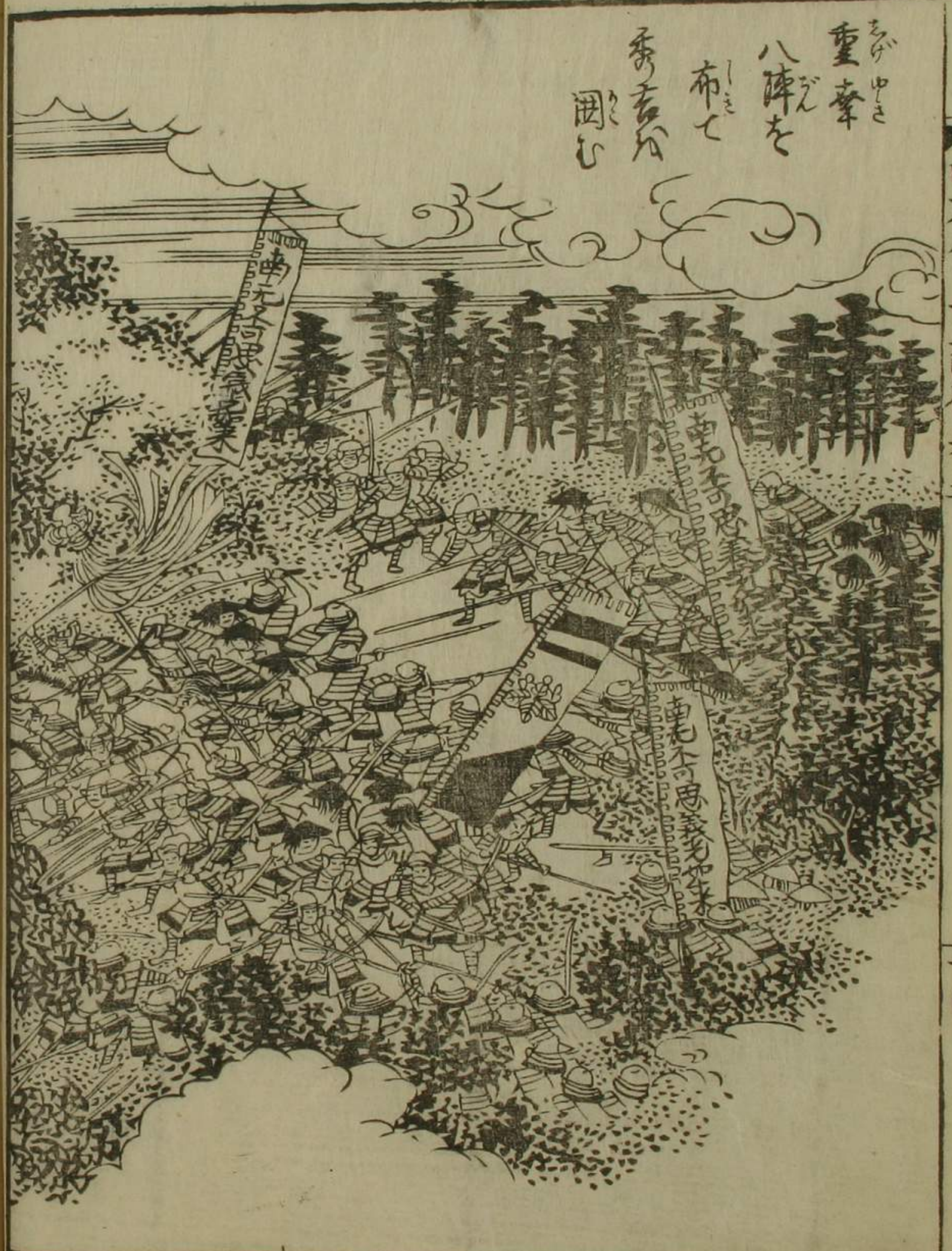
西ノ門ノ外ノ陣



如く右より加藤虎之次行切助惟平控槍平あり虎之次福徳市松  
加藤源六秋坂甚因あり何れも劣らぬ万夫不當の勇士重幸と  
多々よせんと眼と配り引係り重幸是と見り馬この礼と  
幼ひ夢とよやくやうの先よ秀吉の戦書と傳へし跡我速圍  
の雲と開き城とゆく雲よ足下と討戦しつゝあやう討死を遂ん  
とん改めや又及ばんと人も本願寺如上人元来信長云々討  
し陣多分とよきしゆりあつてこれば救軍謀計と揃へ御歌  
とある其一人がふる業之足下厚情はうが我前と信長云々  
この怒りと解と今く本願寺と立居るべき旨よしと吹巻  
つゝあやうのりねおひく足下の徳と教へし秀吉を多々應と  
言て曰く汝がふる其幼いと異し討死と期して我と討戦せば

何ぞらきうくはし兵をひて我りて後討とくとい何をや  
今秀吉が謀中よ漏りあやう尚虚言と吐て人と欺んとするや  
無用の刃を費んするい汝が小門の念佛と唱人刀の改めあやう  
待べしとて重幸言て大に怒り後面の小冠者吉の根と切さげ我  
討死の仇よはさんと槍と捨りて突素とは秀吉も後よ馬と陣  
ちて弛ゆる重幸と槍と合せ二三合突合しが羽柴が近士加藤  
惟行切平秋坂糟谷が軍主人よりやまらあやうが悔むもくひ  
はしと左右より一月よ小門と鳴いて突まき重幸かゝるよはしと  
やどひえん馬とくして味方の陣へ弛込り秀吉自ら後と急と  
うけ先の言よも無効と後と見るとこそきたる多れ人せく  
と小門よ二女三女退りたる重幸の小き丘よ近より圍





か  
中  
重  
八  
陣  
を  
布  
て  
秀  
吉  
の  
陣  
に

西本陣長計巻五

十四



扇と用き一たび味方を拵けが忽ときのこと八方又起り令敷の  
 郷着き天又東き天軍地軍乃二軍巻よせて秀右が左右と圍む  
 加後後為る是と月々く大又怒り近する若と斬らせ矣伏撥虎  
 の荒うの勢ひしてお破んと致し不れ若より龍軍はるより虎  
 軍の隊とともめに方よりを圍むて鉄桶のどし秀右心路き  
 士多と知して右に突きたる突てもけ圍と出るなり然れば此時  
 朝中村勝領賀多まり勇士各三百余人の兵と卒し左右  
 より重幸が勢の中へ面よりくべ切のなほ風雲鳥腕の軍士度  
 後じく三十二隊の倭とはしに隅八面よりゆづり切り鉄炮を  
 飛し矢と放り雨よりし勢よく羽柴が軍兵討り若殺と知  
 ば朝中勝領賀は惜きよりそのいふ勢を下知し一方と切崩さんと

若先又馬を踊らせ槍引とぞた突刺しく懐哉とれと唯雲  
 霧の中又我れどく敵の兵卒の岫のまらざる勢ひは似く  
 突ども切どもけしもしひるまは鯨波八方又殺浸し出べき  
 中りもなうりうりいじしも武功の羽柴も後重幸が八陣よ  
 り又用と伏らむらりや只今討死とやしつんと危きものよ  
 計はし爰又濃州の浪人又竹中守長湯重治と若り廣く和  
 漢の兵書と通し是て天文と地理と要し人中の龍と称せ  
 らるゝ後重幸滅亡の後羽柴能く守り得る富家として晴ふ秀右  
 が軍学兵法の師なり此時秀右と悦みけり出張せしが鈴木が  
 八陣と布て秀右を互後をかこもりと危くが馬と飛して後面に  
 出城尾帯刀と知しつるに今秀右を重幸が八陣よかこまれ放て出るなり





竹中半兵衛  
八陣を  
破る

画本信長記後卷五

十六

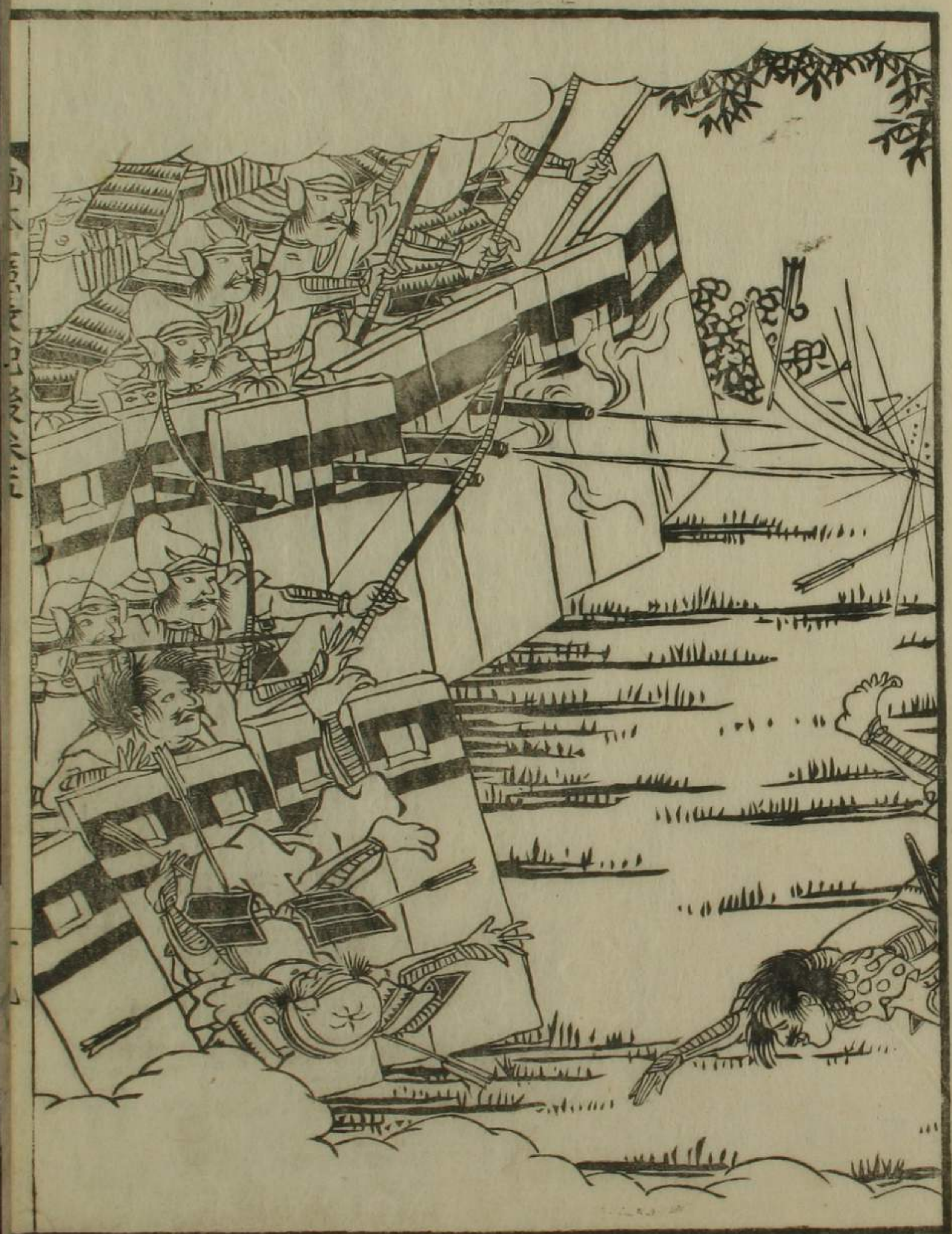


破りて汝軍兵と引て敵の陣より馳入とほしうと証通る陣  
 を打破りたゞめぐりて天陣とつけ抜走と折て龍軍と突崩とを  
 此陣忽破とてあをを斬りて尻尾で命を受け陣門を固ふ  
 重治馬より橋にして八陣八門ととぐくまに押しゆき刀敵は先  
 馬と飛し縁波一を喚くと足にが彼風揚の陣へ文字に突入て走  
 陣とわけ破り竹中がをへのでくたゞり右に折れ切先ととぬ  
 突立とは忽八門の陣をらうくと亂し崩と右に折れ走り  
 重復得たりやかじと叱り懐多天地とつぬきゆき折れ切  
 とは鈴本が兵馬只務くと種風の爲と教れどく大崩と崩と立  
 て立足とて級立に

小密茶討死之事

け時鈴本源左衛門尉重幸いじし布つる縁する八陣務くと  
 崩と亂と心方と心も又六町人などれよとて級立せし  
 今ぞ我死とんき討ちりと懸る味方と目もわけ伏馬の尻  
 をとてしとるう小密茶の尻にたるとも折つて押ひきり  
 羽柴が兵を縦横するぐり側し一石の血路と開きとせ  
 来る武者あり是れ根来の別備小密茶と重幸の死に  
 馬とをありとせ兩眼よりとらくと涙と流し今に右軍師も我  
 美助の陣にありて久軍師再ひ石ら此城へ攻めべき心方と  
 心まげう小切腹と逆折人進むる敵兵何万ありとも命のきり  
 中密茶重幸死すやうとて及ぶべき時呼がはしきつひり  
 の城中文押ひく鈴本重幸とて功の者人と天下の人とま







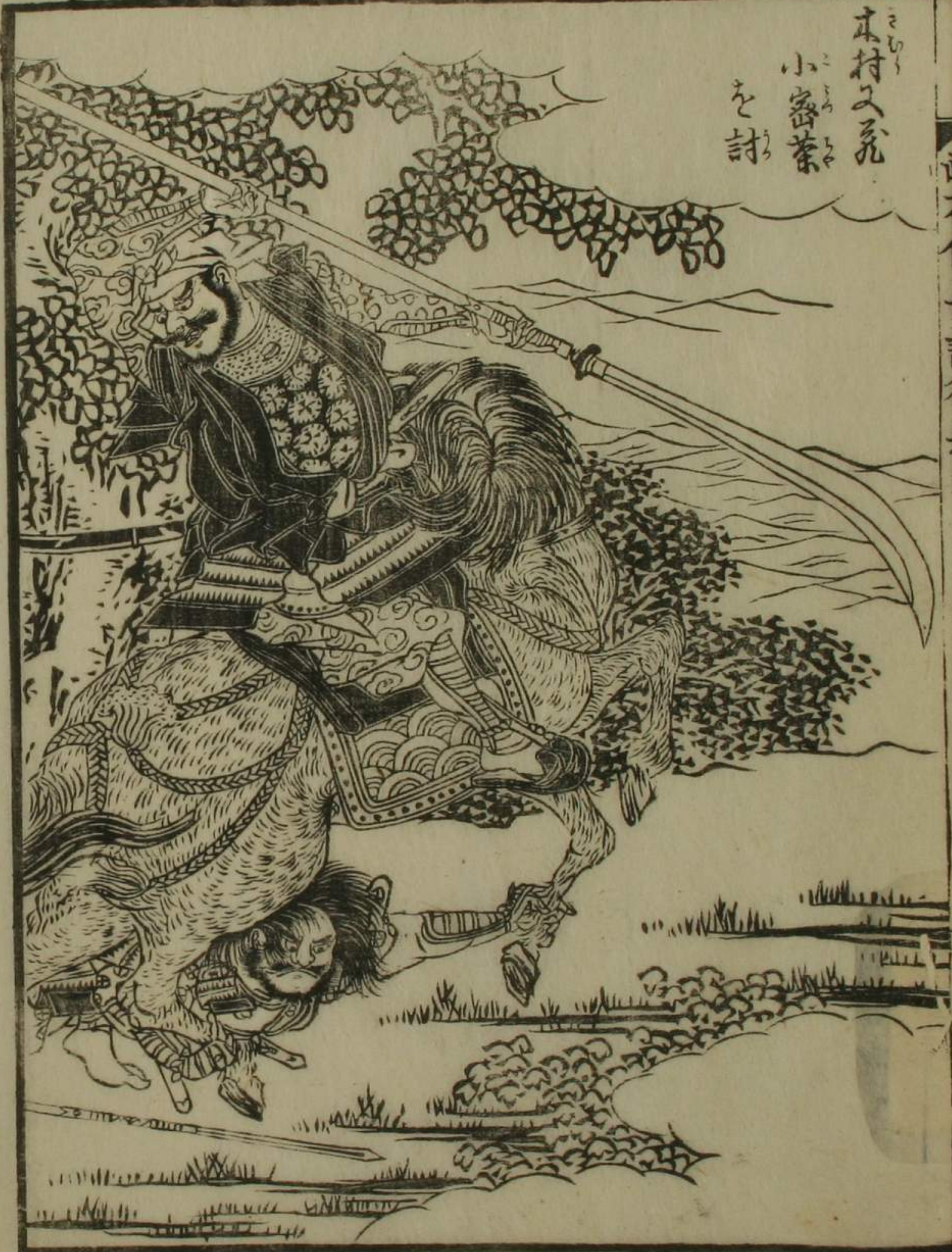
某何宗云甲斐を討死して後代又悪名を抄さんや汝我々と心  
 かけぬあり敵の中へ切入く大なる者又近づくよりさし遠く討死  
 せよこれぞ世の別なりと云ひ終つて小羽柴秀吉が軍兵を  
 霞のどく周を他門へ遣来は小密茶馬と立座し大薙刀を水が  
 又座しむらぐり来る大軍の中を他門と喚ひて薙立る又或は  
 よりどいと切て両段と物横とらん人の控らる武若羽切又斬  
 ころく中又三十余人をころくと薙落し藤利又天林乃荒らる  
 委盡又 驅らるせばいさゝ勇し 羽柴が軍兵小密茶一人又切  
 方へむいと退りたり小密茶勇力ましく加りたりれ秀吉小  
 より肩とて冥途乃去るにふんりのと控らんより小羽柴の  
 方又ふせ飄軍の大馬車朝日く中をころめられたる秀吉乃  
 方と一級して飛砂石に朝中中村勝頼が軍勢極の板の掛合  
 をまふけ又六挺の緊ぎ合せをころくよりおれは城の小女垣  
 ぶく其楯板よりくを接間を用き内より弓矢物をちておま  
 又弘軍の中へ忽ちと城郭の中へお出さるぶくさし強勇不  
 茶と驅破る人きやうくて敵の配鞍を引くこと持楯と座し  
 る矢玉をは長刀をちておまらひく楯ぎの進むことより  
 方乃兵士の中より馬車乃小具足と楯乃中隊番より大男  
 らたくはしき馬又勝里に尺余りの大を力振る小密茶と小  
 いう小御備と物しきよりひ行取つてそより我に加差  
 多小本村又新より日本を敵乃大力の者なりぞ試又一  
 この種をちてせぬ人よりの大を力振るはしかごとけ

方と一級して飛砂石に朝中中村勝頼が軍勢極の板の掛合  
 をまふけ又六挺の緊ぎ合せをころくよりおれは城の小女垣  
 ぶく其楯板よりくを接間を用き内より弓矢物をちておま  
 又弘軍の中へ忽ちと城郭の中へお出さるぶくさし強勇不  
 茶と驅破る人きやうくて敵の配鞍を引くこと持楯と座し  
 る矢玉をは長刀をちておまらひく楯ぎの進むことより  
 方乃兵士の中より馬車乃小具足と楯乃中隊番より大男  
 らたくはしき馬又勝里に尺余りの大を力振る小密茶と小  
 いう小御備と物しきよりひ行取つてそより我に加差  
 多小本村又新より日本を敵乃大力の者なりぞ試又一  
 この種をちてせぬ人よりの大を力振るはしかごとけ





田代三郎左衛門尉



本村又亮  
小密茶  
を討

田代三郎左衛門尉



小密茶少くき度まういにて引降して世のいこまみせんと藤刀おろし  
 交むういごとと夢とくるるといふが忽ち力風いふ門と鳴りあ馬の足  
 着神神は徹しゆあくあ雷のてく小密茶極虎の勢ひをぬき  
 とは又新柳膜の勇と配してをどり入一姓一素着後をさへは時どりの  
 人ませもせは我ふより先や今日の足物なりと両軍鳴りともりて  
 足物小密茶は又新柳膜の勇刀よりの子の敵より謀計をい  
 討ちんと馬の尻をうけて逃るるを又新柳をけきこはし人勢と  
 鳴り門く又六段むり追ふに小密茶ふりうりともまよ長刀をのふ  
 か馬の着安をとりうりともその切うりたる馬の尻尾をたふしうり  
 うり又新柳をさうさき小密茶とていふが小密茶が馬のあまりうり  
 うりかよまうりともいふ人せば小密茶たまりて大地へいといとあうり  
 を

飛飛うりうり二カとに候は首とぞなうりうり

繪本拾遺信長記後篇卷之八終







